

デュルケムの『自殺論』への批判

★ダグラスの批判 (Jack D. Douglas ; *The Social Meanings of Suicide*, 1967)

①ダグラスの批判の一つ目は、デュルケムが「社会的事実としての自殺」と見なし使用した統計は、すでにバイアスがかかっているものであるという問題である。

デュルケムはある社会や集団における統合の度合が自殺率に影響を与えるとみたが、ダグラスは統合の度合など集団の特徴が、ある特定の「死」を「自殺」と規定するかどうかに影響を与えるとみた。つまり、統合された集団であるほど、自殺を隠蔽する傾向が高いために自殺の報告が少ないという傾向がすでに反映されている。だとすると自殺統計は、「自殺の報告」というバイアス、フィルターが入っていて、それは「事実としての自殺」とは異なる。

②デュルケムは自殺の類型化において、自殺の意味づけと無関係にアプローチしているが、最終的には意味づけをしている。熱い自殺とか冷たい自殺とか。社会的意味による自殺の分類を可能にするためには、特定の「死」に接近し、遺族への聞き取り調査などのケーススタディが必要であるが、デュルケムはそのような検証を一切していない。デュルケムは方法論的に知り得ない「権利のない意味づけ」を行っていると言っているとダグラスは批判した。

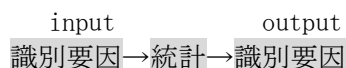
★アトキンソンの批判 (J. Maxwell Atkinson ; *Discovering Suicide:*

Studies in the Social Organization of Sudden Death , 1978)

Atkinsonは、自殺のように知りえないことがどのように社会のなかで、知ったかのようになるのか、例えば、自殺がどれくらいあるか、自殺が多いという話を聞くなど、その「自明性」にいたるプロセスに注目した。検屍官(coroner)というのは、ある死が自殺かどうか、死因を判定する役人であるが、検屍官の存在は「死の意味」が死んだ人本人には属さない、周りの人によって後から決められるものであることを意味する。Atkinsonは、検屍官が死を判定するプロセスに注目し、自殺の判定において、どのような点が重要視されるのかを調査した。

判断は何か一つが決め手になることはないが、*死に方*場所と状況*精神的状態と生活事情を含む社会的環境などを考慮した総合的なもので、「自殺らしきもの」が存在し、典型的な自殺というのが存在するのである。検屍官たちは、そのような‘common-sense theory’を持っており、どの検屍官が判定しても似たような結果となる。Atkinsonは、このような検屍官たちが自殺の判定に使うセオリーが社会学者や心理学者の自殺の説明と似ているということを発見した。

自殺の統計を分析したら識別図式が出てくるが、common-sense theoryをみんなが持っており、典型的な自殺というものが存在するとしたら、デュルケムの統計は予めInputされていたものであり、発見の前から「このようなものが自殺です」といったものを収集してInputしたものがOutputされただけのことである。つまり、発見の手続きの中にあっただけのもので、デュルケムが考えていた自殺の原因の発見は客観的なものでもなく、common-sense theoryをぐるぐる回っただけである。



恐ろしいのは死んだ人も common-sense theoryの中にいたということである。人間は選択肢をたくさん持っているが、普段限られた選択肢だけを考える傾向があって、ある極端な状況に遭った場合に、自殺という選択に開かれやすいということ。「図式」の中において、自殺という選択肢を選んでしまうのである。その選択肢の開かれ方は人によって違うため、その違いによって自殺に走るか、止められるかの差はある。

Atkinsonのこの議論は、「社会の客観的な知」というデュルケムをはじめとする実証主義的アプローチの困難を露わにした。社会は社会の中からは知ることが出来ない。common-sense theoryを自明のものとしなければ、そもそも自殺という「事実」を理解することも共有することも出来ないからである。現象学からする批判(ダグラスなど)とはまったく異なる新しい社会学理論の境地が開かれたと言える。